

Title	江戸と大阪(幸田成友著, 富山房發行)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.173- 175
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

鹿島氏も又この立場なので、第一篇間接原因に於てビスマルクの外交政策より發して三國協商三國同盟の對立にいたつた事情を三百頁を費して敍べられてゐるのである。そして年代的に云つて最初に原因としてあげられてゐるビスマルクの獨逸同盟の成立について論ぜられ、それが原因でないことを云はれてゐるのを初めとして、その後の大戦の原因として論ぜられてゐる問題（露佛同盟の成立、英獨協商の不調、獨逸同盟の攻撃的となりたること等）を一々とりあげ詳しく論ぜられ、次いで次の百頁をもつて戦争の直接の種子をまいた近東及びバルカン問題について論ぜられてゐる。フェルチナンド大公暗殺の原因となつたボスニヤ、ヘルツェゴビナの併合、ロシヤ、ドイツの近東、バルカン政策、ソマニ、フォンサンダー事件を論じ、バルカン戦争に於ける列強の地位を明にし、然して結論に於て、バルカン戦争が世界大戦を從來よりも一層可能ならしめ、この結果に不満なる國は、行動開始に充分強力なりと確信したら挑戦するであらうことは疑ひなく、然もコンスタンチノーブルに獨逸の二個の潮流が來り、バルカンに於てセルビヤの歸趨がヨーロッパの均勢を有利に傾けるものであると論ぜられ、この立場より壅塞關係を見なければならぬと結論されてゐる。

第二篇直接原因に於ては六百頁を費して六月二十八日のサラエヴォ暗殺事件より八月二十三日の日本の参戦にいたる約二ヶ月の歴史、及びその間のほとんどあらゆる問題をあげて本文に於て、或は小さな注に於て論ぜられて居る。八月一日前の數日間の外交は非常に複雑なものであるが鹿島氏はよくその各國の立場を

明にして説明されてゐる。なほ資料の缺けてゐるために論議の餘地がある所があるが、英佛に於ては資料が完全には發表出來ないのであるから止むを得ないであらう。

第一篇間接原因に書かれてゐる部分は從來我が國にも歐洲外交史として比較的多くの書を見出し得るのであるが第二篇の六月二十八日より大戦勃發にいたるまでの詳細なる歴史は原博士の遺稿世界大戦史を除いては殆んどなく、然も原博士の著は大正十二年の作であり、その後多くの外交文書等の資料の發表があつたのである。然るに日本に於てはその後外國に於ての名著が出てゐるに拘らず、然も著者の序文に於て云はれる如く、大戦に對して比較的冷靜に論ぜられる立場にあるに拘らず、雜誌等に於て一部について論ぜられたにすぎなかつたのである。それが今日ヴェルサイユ條約の改訂をもつてドイツの聯盟復歸となへられてゐる時に、この大戦前の外交問題を明にした書を得たことは洵に時機を得たもので、本書な氏の學位論文として提出せられたものゝ由で眞摯な研究であるから、戦前の外交史を研究するものにとつて必讀さるべき良書である。定價七圓（田中荆三）

江戸と大阪（幸田成友著）
（富山房發行）

幸田博士の日本經濟史研究が徳川時代の研究家特にその經濟史的研究家に與へたる貢獻は實に大なるものがあると思ふ。多くの經濟史的研究が近來公刊されてゐるが、同書はその緻密なる研究と、その大なる成果とに於て、到底此等と同一に論ぜらるべきものではなく、今まで不問に附せられ、又は、不明であつた多く

の問題が同書に於て明かにせられてゐるのである。博士は既に大阪市史の編纂を以て、大阪研究の第一人者であることは、周知の事實であり、その造詣に就いては學界の等しく尊敬する所であるけれども、又同時に江戸に就いても極めて深い蘊蓄を有せられてゐることは上述の經濟史に依ても明白な所である。博士は更に日歐交通又は切支丹關係についても非凡なる研究を示されつゝあるのであつて自分は博士の深奥該博なる學殖と、周到且つ緻密なる研究方法に大なる敬意を拂ふものである。

今回公刊された「江戸と大阪」は、東京商科大学に於ける、大正十三年度講義案を訂正加筆したものであつて、その緒言に「自分の研究のためと學生諸君の聽講の便とを併せ慮つて、毎年新しい講義案を作つたので、今日ではそれが相應の分量に達した。これを整理して追々出版したい考は以前からあつたが、毎年新講義案の作製に逐はれて、舊稿の訂正に手を着ける暇を得なかつた。講義のある前夜十一時十二時になつても、まだ翌日の講義案を成就せぬ時の苦痛は、恐らくは教職以外の人々の充分に理解し能はぬ所であらう。」とある。博士の旺盛な研究心とその几帳面な性格とがよくこゝに表れてゐる。毎年同様の講義を繰り返へす大家の多いと聞く時に於いて、誠に尊敬すべき事であると思ふ。自分も嘗て博士の講筵に列した一人であるが、博士の該博なる學殖と巧妙なる話術に、思はずペンを置いて恍惚たらしむらるゝことが多かつた。自分は今でも、江戸時代史のノートを開く毎に博士の研究の立派なることに驚き又同時にその巧みなる話術を追懐するのである。

「江戸と大阪」は、日本經濟史の上から徳川時代の江戸と大阪を比較し、兩市間の關係を研究したものであつて、町人の都である大阪と、武士の都である江戸との比較研究に於ては、この兩市に關する造詣の深い博士をおいて到底他人の企て及ばない所である。

第一市街の發展、先づ江戸が全國の首府となるまでの經過を記し、徳川氏以後の町割の變遷、町並地、寺社門前地、武家屋敷等を述べ、武家地は全體の六割、寺社地、町地は各々二割を占めてゐた事を明にし、更に人口については近頃發表された人口表の材料批判が缺けてゐる點を指摘し、如何に史料の吟味が必要であるかを説かれてゐる。大阪については、各堀開鑿の經過、石高、家數と人口、寺社門前地、藏屋敷等を述べてゐる。第二、市政、この項に於ては江戸大阪の町奉行以下與力同心手先、江戸の町年寄、大阪の惣年寄等より、家持家守借家人、町人の負擔等に至るまで極めて詳細に記述されてゐる。

第三、市内の交通、道路の項に於ては、江戸と大阪の道路の作られた順序の違ふことを述べ、江戸大阪の道路の幅員、交通の自由を防げた路上の建物、庇下の圍込、河岸地の高積等に對する規定、道奉行等を記述し、次に江戸大阪に於ける橋梁及びその普請について、更に交通機關としての馬牛車、駕籠等の流行及び使用の制限について記されてゐる。川筋の項に於ては川筋の取締を初めとして川浚、川船奉行、川船の種類等について述べられてゐる。

第四、江戸大阪間の交通、街道の項に於ては幕府の交通政策、

渡、關所、宿驛、助郷、旅宿、飛脚等について記し、廻船の項に於ては、菱垣廻船、樽廻船、船頭、難破船の處分、江戸積問屋、兩廻船の盛衰、新綿番船、酒番船等について論述されてゐる。

第五金融、兩替屋の項に於いては、各座及び金、銀、錢の種類、貨幣、これ等の法定交換率、兩替屋仲間の員數、種類、相場の立て方、及び立合、預金、振出手形貸付、送金等を詳細に述べ、更に兩替屋の内部の組織より別家の事に及び、商人に於ても武士同等主従の義理の非常に堅かつた状態を記述されてゐる、武士の金融に關しては、藏屋敷の組織、大阪に於ける借金手續、金子調達の手段としての空米切手、藏米の入札、米切手及びその賣買質入等大名の金融關係を詳細に述べ、次で、藏米取張紙直段の説明、札差、その株仲間、所得、貸附利子等すべて旗本御家人の金融について論ぜられてゐる。町人の金融については、貸借の方法より質屋の軒數、その利子、高利貸頼母子（無盡）富等を記されてゐる。

第六御用金、その意義、目的、申渡手續、天保、嘉永、萬延、元治、慶應度の御用金を詳述し幕府は大體十六、七萬貫目の債務を大阪に残して倒壊した事情を明にされてゐる。

第七米、米市、賣買の方法、米切手の轉賣、延賣買等より幕府の米價對策を述べ、田沼時代の經濟史的に見て興味ある時代たる理由をあげ、更に米仲買株及び仲間の組織、江戸に於ける諸藩の米立會所等について記されてゐる。

第八油、江戸に於ける油の消費高、油の種類、大阪に於ける油に關する諸株、油直段引下に對する幕府の政策及びその失敗、油

改所、江戸大阪間の油取引、幕末に於ける油直段の暴騰等を論述されてゐる。油は米に次いで生活の必需品であるが、今まであまり研究されてゐないのである。本章に於ける詳細なる研究は吾々に取つて重要なものである。

第九株仲間、問屋及び仲買の性質、賣買取引の方法、株仲間發生の原因、冥加金、仲間判形帳、株の價、株の讓渡、大阪及び江戸の株仲間、天保の株仲間解放及びその失敗等を詳述されてゐる。

以上は本書の内容の大略を紹介したものであるが、その各章に於て博士の苦心研鑽の跡が見らるゝと共に、その慎重なる史料の吟味と研究について教へらるゝ所が極めて多いのである。金融以後の項目の二三は日本經濟史研究に於ても、既に論ぜられて居り、又江戸大阪の市制についても同書に部分的に研究せられてゐるものもあるが、こゝに兩市を比較して、その關係を縱横に餘す所なく論究され、今まで最も研究を困難とした諸問題を明にした點に於て、實に得難き好著であると言はなければならぬ。更にその苦心蒐集せられた十數葉の挿繪とその流暢なる筆致とは讀者に多大の興味を感ぜしむるものがある。本書は史料の吟味及び研究方法の點より見ても又徳川時代の代表都市を論述してゐる點より見ても、經濟史專攻以外の一般研究者にとつて必讀の好著であることは言ふまでもない所である。（定價二圓五十錢）（今宮新）

熾仁親王日記 卷一（從慶應四年）
（到明治五年）

有栖川宮熾仁親王殿下は、皇室の懿親を以て、維新の鴻業を輔翼せられ、政治軍事兩方面に於いて、常に重大なる任務を行はせ